

英領インド帝国の「建国の母」を記憶させる試み

—ヴィクトリア・メモリアル・ホール（カルカッタ）の消長—

本 田 毅 彦

はじめに

1901年1月22日に亡くなったヴィクトリア女王の葬儀は、厳粛に、また感動的に行われた¹⁾。既に、彼女のために二度にわたってジュビリー（即位後五十周年記念式典、同六十年記念式典）が行われていたため、イギリス政府にとり、こうしたイヴェントの設営は、いわば手慣れた課題になりつつあった²⁾。この頃、ヨーロッパの諸王家には、ヴィクトリアの子孫たちが数多く存在するようになっていた。そのため、ヴィクトリアの葬儀には、ヨーロッパ各国の君主や、王室メンバーたちが参列した。

ヴィクトリアの葬儀が終わった後、首都ロンドンに「偉大だった女王」を記念するためのモニュメントを設けるべきでは、との議論がなされ始め、その結果、1901年3月に「ヴィクトリア・メモリアル」をバッキンガム宮殿前に建設することが決まり、1911年に竣工している。しかし、それとほぼ平行する形で、イギリス人たちは、当時「イギリス帝国の第二の首都」ともみなされるようになっていたインドのカルカッタにも、「ヴィクトリア・メモリアル・ホール」と呼ばれることになる、壮麗な記念館の建設を決めていた。このような決定には、以下で見ていくように、インド副王＝総督だったジョージ・ナサニエル・カーゾン（1899年から1905年にかけて在位）の意向が、強く作用していた³⁾。

本稿では、イギリス帝国主義の絶頂期において、故ヴィクトリア女王を英領インド帝国の「建国の母」として人々に記憶させようとする試みだった、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの構築が、第一次世界大戦をはさんでどのような経緯をたどることになったのかを、それに関わってカーゾンが残した書簡などに依拠しながら、考えたい⁴⁾。

1) ケイト・ハバート（橋本光彦訳）『ヴィクトリア女王の王室一側近と使用人が語る大英帝国の象徴の真実』原書房、2014年、456-461頁。

2) デイヴィッド・キャナダイン（辻みどり／三宅良美訳）「コンテクスト、パフォーマンス、儀礼の意味—英国君主制と「伝統の創出」、一八二〇—一九七七年」、E・ホブズボウム／T・レンジャー編（前川啓治／梶原景昭他訳）『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年、163-258頁。

3) Dhruvajyoti Banerjea, *European Calcutta: Images and Recollections of a Bygone Era* (New Delhi: UBSPD, 2005), p. 267.

4) ただし、カーゾンや、彼と同時代の人々が、故ヴィクトリア女王を「建国の母 (Founding Mother)」と呼んだ、という事実はない。「建国の母」は、カーゾンの意図を筆者が推量し、表現するために思いついたものである。

1 ヴィクトリア・メモリアル・ホールの構築

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの現況

現在、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、自らのことを「記念館であり、インドの中世・近代史を扱う歴史博物館である」と称している⁵⁾。行政上の位置づけとしては、インド共和国政府の文化省・文化局の管轄下にあるが、自律的な組織であり、西ベンガル州総督を議長とする、信託委員会によって運営されている。

また、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、自らの沿革と概要を、以下のように説明している。同ホールは、1901年に、時のインド副王＝総督カーゾンによって、亡きヴィクトリア女王を記念するために構想された。カーゾンは、インド史に関わる興味深い事物の収集を開始し、サー・ウィリアム・エマソンを建物の建築家に任命した。1906年1月4日、インドを公式訪問中のイギリス王太子（後のジョージ五世）により、建物の礎石が置かれた。主要な工事は1921年までに完了したが、建物の四隅に見られるキューポラは、1934・35年に付加された。

メモリアルの博物館は、1921年12月28日に一般に公開された。収蔵品の総数は3万点に近く、ヴィクトリア女王、インドにおけるイギリス人たちの事績に関わる記念品がその主体である。

メモリアルのテーマとしての、ヴィクトリア女王

インド／パキスタンの分離独立（1947年8月）以前には、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの第一義的な目的は、「イギリス国王＝インド皇帝としての、故ヴィクトリア女王を追慕し、その業績を記念する」ことだった。これは、こうした施設を設け、運営することが、英領インド帝国という政治体制を維持し、強化するために必要であり、有効だ、との、インド副王＝総督カーゾンの発意に基づいていた。

カーゾンは、インド社会に住む多くの人々に「英領インド帝国」という統治システムについての具体的なイメージを抱かせようとしており、そのイメージの基軸は、つまるところ、「ムガル帝国の後継国家としての、英領インド帝国」だった。従って、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのアイデアを構想していく上でも、後に詳述するように、カーゾンの念頭には、タージ・マハルのイメージが常に存在していた。タージ・マハルは、ムガル皇帝シャー・ジャハーンが、愛妃ムムターズ・マハルの死を悼んで建築させた墓廟であり、白大理石をふんだんに用いたその美しさは、創建直後から世界に知れ渡っていた。しかし、カーゾンが副王＝総督に着任する以前には荒廃した状態になっており、カーゾンはそれを熱心に修復させた（彼は、インド社会の伝統的な建築物や文化財の修復・保存全体に関して、意欲

5) 本節の内容は、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの公式ウェブサイト (<https://www.victoriamemorial-cal.org/home/content/en>) の説明によっている。

的だった⁶⁾。そうした経緯もあって、ヴィクトリア女王の死に際してカーズンは、タージ・マハルのコンセプトを転用することを思いついたのであろう。ただし、その際にカーズンは、ヴィクトリアを英領インド帝国の「建国の母」として人々に記憶させ、表象させるための施設を、亡き女王の単なる墓廟として、だけではなく、まさしく近代的に、と言うべきか、彼女の生涯をテーマとする博物館として構築しようとした⁷⁾。

それでは、ヴィクトリア女王は、その存命中に、イギリス帝国社会（その中には、英領インド社会も含まれていた）において、どのように認識され、どのような機能を果たしていたのか。ヴィクトリアと、その夫であるアルバートは、イギリス王室を、イギリス本国社会のみならず、イギリス帝国社会の統合の象徴として位置づける、というアイデアを抱くようになり、それに基づく活動を開始していた。そのような活動の第一弾が、アルバートを主要なプロモーターの一人とし、イギリス王室全体がその運行に関わった、1851年のロンドン万国博覧会だった⁸⁾。しかしアルバートが1861年に死去し、ヴィクトリアは長い服喪期間に入ってしまう⁹⁾。そうした状態からヴィクトリアを連れ出し、イギリス帝国社会の統合の象徴としての機能を再開するきっかけを与えたのが、首相ベンジャミン・ディズレーリであり¹⁰⁾、とりわけ、彼が主導した1877年のヴィクトリアのインド女帝宣言だった¹¹⁾。

他方、ヴィクトリア女王個人と、インド社会の人々の間には、19世紀後半を通じて、それなりに安定した関係が築かれつつあった。19世紀末の時点では、インドの多くの都市にヴィクトリアの名を冠した道路、広場、公共建築物が存在するようになっていた¹²⁾。19世紀半ばに、インド社会の広く多様な部分で生じた対英蜂起（インド大反乱）を鎮圧し、報復を行ったのは英領インド軍、イギリス軍部隊であり、ヴィクトリアはその究極の指揮者だった。従ってヴィクトリアは、インド社会の多くの人々にとって、畏怖し、服従せざるをえない支配システムとしてのイギリス権力の象徴になった。しかし他方で、インド大反乱がほぼ鎮圧された

6) Syed Sirdar Ali Khan, *Lord Curzon's Administration of India: What He Promised; What He Performed* (Bombay: The Times Press, 1905), pp. 98–101; G.H. Bennett and Marion Gibson, *The Later Life of Lord Curzon of Kedleston – Aristocrat, Writer, Politician, Statesman: An Experiment in Political Biography* (Lampeter: The Edwin Mellen Press, 2000), p. 227; Hugh Tinker, *Viceroy: Curzon to Mountbatten* (Oxford: Oxford University Press, 1997), pp. 24–25. イギリスに戻った後も、カーズンのそうした姿勢は変わらなかった。四元忠博『ナショナル・トラストの軌跡—1895～1945年』緑風出版、2003年、120、159–160頁。

7) Lovat Fraser, *India Under Curzon and After* (London: William Heinemann, 1911), p. 236.

8) 安高啓明『歴史のなかのミュージアム—驚異の部屋から大学博物館まで』昭和堂、2014年、46頁。

9) ハバート、前掲書、288–293、307–314頁。

10) 同上、315–321頁。ジャン＝フランソワ・ソルノン（神田順子他訳）『ロイヤルカップルが変えた世界史・下—フリードリヒ・ヴィルヘルム三世とルイーゼからニコライ二世とアレクサンドラまで』原書房、2021年、85頁。

11) 女帝宣言に関してヴィクトリアは、ディズレーリに比べて、より積極的だった。村岡健次「ヴィクトリア女王とディズレーリ」、川本静子／松村昌家編『ヴィクトリア女王—ジェンダー・王権・表象』ミネルヴァ書房、2006年、206頁。

12) A・J・クリストファー（川北稔訳）『景観の大英帝国—絶頂期の帝国システム』三嶺書房、1995年、279–284頁。

後、時を置かずにヴィクトリアの名で出された、イギリス支配権力とインド社会の間での「和解」を呼びかける統治方針が、インド社会の一定部分では、比較的好意的に受け止められた¹³⁾。そのようになった理由に関しては、イギリス本国政府（とりわけ、イギリス国王）が、「インド大反乱を生じさせた直接の責任」を東インド会社に帰することができた、という事情が大きかった。ヴィクトリアという存在を通じて、インド社会の人々によって表象されることになったイギリス本国政府は、東インド会社から距離をとり、インド社会に多大な苦痛を与えた東インド会社の責任を問い、それを解散させる、というポーズをとることができた。そして、以後は、イギリス本国政府がインド社会に対して、より共感を重視する統治を行う、とのプレゼンテーションを行ったわけである¹⁴⁾。

こうしたヴィクトリアの意思表示を後押ししていたのは、アルバートだった¹⁵⁾。さらに、従来の「インド総督」という称号に加えて、イギリス国王の代理として「副王」も称することになったチャールズ・カニングが、自らを主役とするダーバー（上位の権力者に対して、下位の権力者が忠誠を誓う、インド社会の伝統的な政治儀礼）を行う中で、ヴィクトリアの統治方針をインド社会の伝統的エリート層（藩王たちを中心とする）に伝達しようとした¹⁶⁾。しかし、インド統治に関してヴィクトリア／アルバートが提起したアイデアは、それから間もなくしてアルバートが死去し、また、数度にわたって、新たなインド副王＝総督が任命される時期に政権を握っていたのが、インド統治に関して、19世紀前半の「近代化路線」を維持していた自由党であったため、積極的に展開されることはなかった。

保守党指導者のベンジャミン・ディズレイリが1874年に首相に就任して以降、変化が生じた。ディズレイリは、王太子アルバート（後のエドワード7世）のインド訪問計画を支持し、それを実現させた。ディズレイリの主な意図は、イギリスの大衆新聞に王太子のインド訪問を詳しく報道させ、インド統治へのイギリス社会一般の関心を高めることだったが、インド社会の伝統的エリート層への働きかけという点でも、この企ては成功を収めた。すなわち、王太子の訪問を接受し、彼と個人的に接触することを通じて、インド人藩王たちのイギリス君主制への関心と、それへの一体感が高められることになった。さらに、1877年のヴィクトリアのインド女帝宣言が、インド亜大陸には英領インド帝国という政治秩序が実在しており、少なくとも当分の間はそれが持続するだろう、との意識を、インド社会全体に定着させることになった¹⁷⁾。形骸化したムガル皇帝の権威の背後に隠れながら、東インド会社が実質的にインド社会を支配する、という状況は、1877年から既に二十年近く前に、インド大反乱の鎮

13) Judith M. Brown, *Ghandi: Prisoner of Hope* (New Haven: Yale University Press, 1989), p. 45.

14) Miles Taylor, *Empress: Queen Victoria and India* (New Haven: Yale University Press, 2018), pp. 64–85.

15) Stanley Weintraub, *Uncrowned King: The Life of Prince Albert* (New York: The Free Press, 1997), pp. 351–353.

16) ハバート、前掲書、226–228頁。

17) バーナード・S・コーン（多和田裕司訳）「ヴィクトリア朝インドにおける権威の表象」、ホブズボウム／レンジャー編『創られた伝統』259–322頁。

圧を通じて制度的には清算されており、イギリス国家が正真正銘のインド社会の支配者になっていた¹⁸⁾。しかし、インド社会に住む多くの人々にとっては、イギリス国王であるヴィクトリアがインド皇帝を称することにより、彼らが慣れ親しんできた「帝国」の権力構造が復活したのだ、とイメージすることが可能になった¹⁹⁾。

ヴィクトリア個人も、インド統治に関しては一定の関心を維持しており、歴代のインド副王＝総督たちとの間で、定期的に、それなりに熱心な交信を行っていた²⁰⁾。また、彼女からの承認を得て、インド社会の新旧エリート層に属する人々（イギリスによるインド支配の「協力者」たち）に対して勲位が授与されていった。ヴィクトリアは、イギリスを訪問する、あるいはイギリスに留学してきた藩王たち（およびその子弟）と、活発に交流してもいた。

インド大反乱以後、アフガン戦争、ビルマ戦争など、主として英領インド周辺を舞台とし、英領インド軍が関わったアジアでの諸戦争は、そのすべてがヴィクトリアの名の下に戦われており、そのいずれの帰趨に関しても、彼女は強い関心を示した。ヴィクトリアの在位五十周年と六十周年を祝うためにロンドンで大々的に行われたイベントでは、派遣された英領インド軍部隊の存在感がイギリス人たちの関心を集めたが、そうした事態はヴィクトリア自身が望んだことでもあった。私生活の面でも、ヴィクトリアは自分の身の回りにインド人の使用人を置いていた²¹⁾。

ヴィクトリアが死去した際には、その知らせが非常な速さでインド社会の民衆レベルにまで広まった²²⁾。ロンドンで行われたヴィクトリアの葬儀には多くの藩王たちが参列し、王室に対して弔意を表すメッセージがインド社会の様々な団体から寄せられた²³⁾。

ヴィクトリア・メモリアル・ホール建設プロジェクトの発案者／主導者としてのカーゾン

カーゾンは、ヴィクトリアの死の直後から、亡き女王＝女帝にふさわしいモニュメントをインドに築くことを構想し始め、そうした考えをインド社会の人々に対して提起した²⁴⁾。彼によれば、そのようなモニュメントは、「『堂々』としており、広々としていて、記念碑的で、巨大な建築物であり、上品な庭園によって囲まれている」べきだった。具体的には、「歴史を主題とする博物館として、人々が、この国 [英領インド帝国] の歴史上、顕著な役割を果

18) C・H・アレクサンドロヴィッチ (D・アーミテイジ/J・ピッツ編, 大中真他訳) 『グローバル・ヒストリーと国際法』日本経済評論社, 89-94頁。

19) David Cannadine, *Victorious Century: The United Kingdom, 1800-1906* (New York: Viking, 2017), pp. 375-376.

20) George Nathaniel Curzon, *British Government in India, Volume Two* (London: Cassell and Company, Ltd., 1925), p. 129.

21) ハバート, 前掲書, 340-342, 403-422頁。

22) Walter Roper Lawrence, *The India We Served* (London: Cassell and Company, Ltd., 1928), pp. 239-242.

23) George Nathaniel Curzon, *Speeches on India, delivered by Lord Curzon of Kedleston, viceroy and governor-general of India, while in England in July-August, 1904* (London: John Murray, 1904), p. 13.

24) David Gilmour, *Curzon* (London: John Murray, 1991), p. 235.

たした男たちの絵や像を目にし、自分たちの過去に誇りを抱くことができるようなものにするべきだ」と主張した²⁵⁾。つまりカーズンは、前項で見たような背景を踏まえて、故ヴィクトリア女王を英領インド帝国の「建国の母」に仕立て上げようとしており、「ヴィクトリア・メモリアル・ホール」と名付けられることになる博物館を、そのための「メディア」とすることを構想していた。

ただしカーズンの展望は、さらに野心的だった。彼は、ヴィクトリア女王からエドワード七世への代替わりを利用して、インド社会に生きる人々に、英領インド帝国という政治単位が醸し出すイメージを内面化させることも企図していた。そのために彼が組織し、1903年に実現したのがインペリアル・ダーバー（デリー・ダーバー）という大規模な政治イベントであり、インド社会の有力者たちを網羅的にデリーに招集し、エドワード七世が新たなインド皇帝となったことを宣言し、有力者たちに彼への臣従の誓いを行わせた。カーズンのコンセプトの中では、インペリアル・ダーバーは、英領インド帝国という政治単位のありように関する、支配者（イギリス人）と被支配者（インド社会の人々）の間での、「契約更新」行為でもあるはずだった。そしてカーズンは、そのような契約の更新がなされたことを具体的な「形」として残すために、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの造営を成し遂げようとした。

従ってカーズンは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールという記念碑を、インド社会に生きる人々の認識回路の中で受け入れやすいものにする必要性も、意識していた。その際に、とりわけカーズンが注目したのは、ムガル帝国社会において皇帝家の墓廟が果たしていた役割だった²⁶⁾。ムガル皇帝家に属する人々の墓廟では、建築物、その内部の装飾、それを取りまく庭園が、壮大さ、精妙さ、美しさを備えており、それらを目にする者に、強い心理的な効果を及ぼした。人々は、それらによって魅了され、そうしたものを創り出すことのできる「権力」に対して敬意を抱き、それに依存するようになった、とカーズンは解釈した。

遡れば、ムガル皇帝家の墓廟にしても、その造営のヒントは、インド社会のイスラーム神秘主義聖人たちの墓廟（ダルガ）にあった²⁷⁾。インド社会では、イスラーム神秘主義を掲げて活動する聖人たちが、ムスリムだけでなく、ヒンドゥー教徒たちによっても尊崇の対象とされることがあり、その死後、彼らの墓廟は、ムスリム／ヒンドゥー教徒双方にとって聖地とされた²⁸⁾。そうした宗教上のありようを政治権力の側が接収する形で造られたのが、ムガ

25) Thomas R. Metcalf, *An Imperial Vision: Indian Architecture and Britain's Raj* (London: Faber and Faber, 1989), p. 203.

26) 宮原辰夫『インド・イスラーム王朝の物語とその建築物—デリー・スルターン朝からムガル帝国までの五〇〇年の歴史をたどる』春風社、2016年、160–161頁。

27) 皇帝即位後、シャー・ジャハーンは、チシュティイ教団の創始者ムイーヌッディーンの墓廟があるアジメールのほとんどの建築を手がけた。フランシス・ロビンソン（小名康之監修）『ムガル皇帝歴代誌—インド、イラン、中央アジアのイスラーム諸王国の興亡（1206–1925年）』創元社、2009年、224頁。

28) 荒松雄『多重都市デリー—民族、宗教と政治権力』中公新書、1993年、147–149、180–187頁。

ル皇帝家の墓廟だった、と考えられる²⁹⁾。

しかしカーズンは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールを、インド社会における権力と権威の伝統的なありように添わせる、という意図だけで構想してはいなかった。インド社会には既に、カルカッタのような交易都市を中心として、イギリス人たちとの接触から刺激を受け、「近代化」されつつあるインド人たちが多く存在するようになっていた。そして彼らは、新たな階層としてナショナルな（インド国民主義的な）運動を行い始めてもいた。カーズンが、ヴィクトリア・メモリアル・ホールを単なるモニュメントにとどめず、博物館的施設にすることを構想したのは、こうした人々の動向にも対応し、むしろ彼らを「帝国臣民」へと「教化」しようとしていたから、でもあったはずである³⁰⁾。

さらにカーズンは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールが、カルカッタに居住する人々が文化・芸術に関わる活動を行っていく際のセンター、また、カルカッタに居住する人々に社会的アメニティ（快適さ）を供給する場所（公園）となることも、期待していた³¹⁾。カーズンの念頭にあったのは、19世紀半ばにロンドン万国博覧会が成功を収めた後、その成果と収益を活用する形で、ロンドンのケンジントン地区に、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、科学博物館、自然史博物館、ロイヤル・アルバート・ホール、インペリアル・カレッジなどが建てられていった、という経緯だった³²⁾。カーズンは、1903年のインペリアル・ダーバーという祝祭の後、それを記念し、そこから新たな「文化」を生み出していくための、いわば培養器として、ヴィクトリア・メモリアル・ホールを構築するべきだ、とも考えていたはずである。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの建設資金の調達

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの建設費用は、総額で1050万ルピーに達したが、そのすべてが、インド社会からの「自発的な醸金」によってまかなわれた、とされる³³⁾。つまり、英領インド帝国政府、イギリス本国政府の予算は用いられず、藩王たちをはじめとする、インド社会の有力者たちから寄付金を集め、それをカーズンが思い通りに使用した、ということになる。

29) ただし、権力者たちのこうした夢想と、彼らが働きかけようとした民衆の思いが一致するかどうかは、また別の問題である。ウィリアム・ダルリンブル（柴田裕之訳）『精霊の街デリー—北インド十二月』凱風社、1996年、244頁。

30) メトカーフによれば、「ヴィクトリア・メモリアルから『愛国主義 (patriotism)』を学ぶことを意図されていたのは、主として〔イギリス式〕教育を受けたインド人たちだった」。Metcalf, *op. cit.*, p. 210. また、カーズンの秘書官だったローレンスによれば、カーズンは、ヴィクトリアのためのメモリアルを、英領インド帝国に貢献した人々の「ヴァルハラ」にすることも構想していた。Lawrence, *op. cit.*, pp. 244–245.

31) George Nathaniel Curzon, *British Government in India, Volume One* (London: Cassell and Company, Ltd., 1925), p. 193.

32) 重富公生『産業のパクス・ブリタニカ—1851年ロンドン万国博覧会の世界』勁草書房、2011年、174–179頁。

33) Curzon, *British Government, Volume One*, p. 185; Lawrence, *op. cit.*, pp. 245–246.

インド社会からの寄付によってヴィクトリア・メモリアル・ホールを構築する、というコンセプトも、カーゾン自身が提起したものだ。ヴィクトリア・メモリアル・ホール構築のために、そのありようをカーゾンが転用することを意図したイスラーム神秘主義の聖人たちの墓廟は、言うまでもなく、インド社会に居住する多様な人々からの寄進によって建てられ、維持されていた。カーゾンは、それに倣い、「英領インド帝国の権威は、インド社会の人々によって広く受け入れられている」というイメージを、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの造営と維持を通じて演出しようとした。

しかし結局、寄付金の大半は、藩王たちから集められた。藩王たちの権威を称え、時に彼らを威嚇することによって、彼らの持つ伝統的な権威と資金を徴発する。そして、それらを効果的に組み合わせる形で、イギリスが保持する「パワー」をインド社会に対して提示し、それと同時に、藩王たちの権威の源も再充填させる、というサイクルこそが、カーゾンのインド統治方針の要諦だった³⁴⁾。従って、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの構築は、カーゾンにとり、そうした統治方針を展開していくための不可欠の一環であり、また、それを象徴する事業でもあった。そしてカーゾンは、デリーでのインペリアル・ダーバーの機会を利用し、ヴィクトリア・メモリアル・ホール建設のために、藩王たちから更に基金を募ることになる³⁵⁾。

副王は、ヴィクトリア女王メモリアル基金の状態について知りたいか、と思い、[1903年12月] 31日時点での状態を報告する。我々が目標としているのは、500万ルピーだが、粗収入 (a gross income) は493万7066. 112ルピーであり、約6万3千ルピーが足りない。…しかし、この額でも、サー・ウィリアム・エマソンのデザインを実現するのには十分ではない。そのため、最近、副王は私 [インド政庁の財務担当官] に向かって、カルカッタで、ダーバーが終了する時点で、寄付を増額することを望む藩王たちに対して、10万ルピー以上の増額を許すつもりだ、と言った。

既に明らかなように、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの構築は、カーゾンという、過度なほどのリーダーシップを持つ人物が、英領インド帝国に関する、その独自の信念に基づいて実現した事業だった。その際、カーゾンは、イギリス貴族としての政治的美意識に基づいて行動してもいた、と考えられる。18世紀から19世紀半ばにかけて、イギリス貴族の多くが、植民地帝国が彼らに提供する、様々な利権を通じて蓄えた資産を活用し、自らの邸宅の

34) Ikram Ahmed Butt, *Lord Curzon and the Indian States 1899-1905* (Bloomington: AuthorHouse, 2007), p. 323.

35) Sir P. Playfair to Sir Walter Lawrence, 8 January 1903, MSS Eur F 111/207, India Office Private Papers, British Library. (以下では、'India Office Private Papers, British Library' を 'IOPP, BL' と略記する。)

建築や庭園の造成，美術品の収集などを行っていた³⁶⁾。カーズンは，そうした活動を，副王＝総督としての自分の地位を活用することにより，インド社会において大々的に展開しようとしていたはずである³⁷⁾。

コレクションの形成

ヴィクトリア・メモリアル・ホールのコレクションの構成，展示の仕方に関しても，基本的なコンセプトを準備したのはカーズンだった。そうしたアイディアは，1901年半ば頃から，カーズン，エドワード七世，イギリスの美術界の有力者たちの間で活発な通信が行われることを通じて，具体化されていった。

カーズンは，まず，コレクションの中核を形成するために，ロンドンでの自らの代理人としてG・W・フォレスト（かつて，インド政庁のアーキヴィストだったが，当時は作家に転じていた）に白羽の矢を立て，プロジェクトに関する自身のアイディアを説明した。フォレストは直ちに行動を始め，ロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーの責任者であり，王室の美術品コレクションのコンサルタントでもあった，ライオネル・カストに接触した。フォレストは次のようにカーズンに報告している³⁸⁾。

貴卿が提案する，カルカッタのヴィクトリア・メモリアル・ホールについての書類を送ってもらえたことに，感謝します。その手紙を受け取った翌々日，私はサヴィル・クラブでライオネル・カスト氏に会い，[ホールに陳列するのに] 必要な内容物を入手するための最善の方法について，尋ねました。我々は，次のように合意しました。ヴィクトリア・メモリアルは，第一にパーソナルであるべきで，ヴィクトリア女王，エドワード国王，王室全体の肖像画を含むべきです。また，女王陛下の治世中の，王家に関わる主要な出来事と，公式のペイジェントに関わる絵画が集められ，公衆のために展示されるべきです。…私は日曜日にカスト氏に宛てて手紙を書き，貴卿からの書簡を受け取ったことを伝え，ホールの内容物を入手する最善の方法について，彼の助力ないしは助言を求めました。私は，既に私が言及した性格を持つ絵画のコピーないしレプリカが，女王がインドの人々の心中に

36) 小林章夫『図説・英国庭園物語』河出書房新社，1998年，74-80頁。ブラック・ライヴズ・マター運動が盛り上がる中，BBCは，そのオンライン上の2020年9月20日付の記事 (<https://www.bbc.com/news/uk-england-leicestershire-54018340>) で，「[イギリスの] ナショナル・トラストが，[同団体の所有する史跡への] 訪問者たちに対して，[屋敷や庭園などの，同団体の] 所有物を，新鮮な視点から，すなわち，それらがイギリス帝国の後ろめたい過去を反映する恩恵なのだ，ということを抑えながら眺めることを呼びかけている」と伝えている。

37) カーズンがそこで育った，イングランド・ダービシャー州の「ケドルストン・ホール」は，18世紀半ばの風景式庭園として「逸するわけにはいかない」ものであり，ロバート・アダムによって「一七五九年から一七六五年にかけて建築された[同ホールの] 建物は古典主義的な中にも優美さを漂わせ，部屋の意匠もロココ的な軽やかさに満ちている」とされる。小林，前掲書，84-85頁。

38) G. W. Forrest to Viceroy, 10 May 1901, MSS Eur F 111/181, IOPP, BL.

灯したイギリス王権へのパーソナルな関心と献身を、これからも息づかせ続けることになるだろう、と考えています。水曜日、驚いたことにカスト氏は、私からの手紙を国王に見せ、それを讀んだ国王は賛意を表わされ、彼 [カスト] に対して、幾つかの絵画を貴卿に提供するように命じた、と私に語ってくれました。…国王からの下賜が多くの人々を刺激し、皇帝の振る舞いの例に倣うことになるでしょう。／さらに私は、カスト氏に、インド帝国を建設し、支配してきた政治家や軍人たちの肖像画のオリジナル、コピー、レプリカの入手方法について、相談しました。同氏の考えでは、どのような肖像画についても、80ギニーから100ギニーで優れたコピーを入手できる、とのこと。エキスパートたちが私に語ったところでは、絵画や彫刻に関してならば、カスト氏以上の目利きはイングランドにおらず、カスト氏ほどに絵画の値段に詳しい人物もいない、とのこと。従って、肖像画と胸像の収集に関しては、カスト氏に一任することをお勧めします。／ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、もしも貴卿が、ホールの少なくとも一室を貴卿の治世の肖像画とともに公開し、それらで飾りつけることを主張されるとすれば、一幅の素晴らしい帝國的な作品になるでしょう。…従って私は、インドが、帝國的国民にふさわしいメモリアルを、帝国の首都に建立する意志を持つ支配者を得たことを、喜んでおります。しかしそれは、委員会によってはなされなないでしょう。副王御自身によって、それはなされなければなりません。

カーズンは、フォレストからの書簡を受け取るのとほとんど同時に、カストからの書簡も受け取っていた。カストはカーズンに、エドワード七世の意向を正式に伝えた³⁹⁾。

私は、国王陛下によって、メモリアルに関して次のように述べることを許されました。国王陛下の願いは、ヴィクトリア女王の治世の主要な出来事を記念する幾つかの絵画を、メモリアル・ホールのために、副王である貴卿に提供することにあります。／これらの絵画は、ロイヤル・コレクションの中にあるオリジナルのコピーであり、故女王の命で作成されたものです。

カーズンはカストに宛てて札状を書き、メモリアルは故ヴィクトリア女王の神殿 (shrine) になるべきだ、との自らの考えを伝えた⁴⁰⁾。

国王陛下からの御提案を受け入れることに関して、私は、満足と感謝の念を表現する術を知りません。故女王のために聖別されたホールが、この建物の中心的な特徴となるでしょう。おそらく、その中央に彼女の像が配置されます。その周りには、彼女の生涯と治世に

39) Lionel Cust to Viceroy, 8 May 1901, MSS Eur F 111/181, IOPP, BL.

40) Viceroy to Lionel Cust, 30 May 1901, MSS Eur F 111/181, IOPP, BL.

ついて語る、絵画やメメント〔記念品〕が並べられるべきです。これらの絵画は、こうしたコレクションのための計り知れないほどに貴重な核となるでしょう。私は、国王陛下からの下賜に対して、心から感謝いたします。

セントラル・ホールは、彼女〔故ヴィクトリア女王〕に関する記憶だけのために捧げられる、ある種の神殿となるべきです。

カストは、1902年後半の段階で、ヴィクトリア・メモリアルのためのコレクションの構築を順調に続けており、その経過をカーズンに報告していた⁴¹⁾。

建物の設計

1903年7月以後、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの建物の構築も動き始めた。カーズンは、インド省事務次官アーサー・ゴッドリーに対して、「〔休暇のために自分が〕インドを出発する前に、ホールのためのコレクションを開始したい。この冬には始めるつもりだ」と告げるのと同時に、サー・ウィリアム・エマソンの手になる、ホールの基本的なデザインを同省に宛てて送っている⁴²⁾。

カーズンは、インペリアル・ダーバーの準備に並行させる形で、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのプランを具体化していった。インペリアル・ダーバーを行う場所としては、カーズンは、1877年の際のインド副王＝総督リットンの判断に倣ってデリーを選んだ。しかしカーズンは、ハイブリッドな権力としての英領インド帝国の首都としては、カルカッタこそが最もふさわしく、従って、その「建国の母」を記念するヴィクトリア・メモリアル・ホールも、カルカッタに所在するべきだ、と考えていた。ちなみに、1911年インペリアル・ダーバーに際して、カルカッタからデリーへの遷都が発表されると、カーズンはそれに強く反発することになる⁴³⁾。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの建物・庭園のデザインに関しても、カーズンは、その基本的なコンセプトを自ら定めようとしていた。建物・庭園のデザイナーたちは、事実上の「施主」であるカーズンからの注文を受け入れ、それらを忠実に具体化していくことになる。

建物に関しては、サー・ウィリアム・エマソンがデザイナーとなり、カルカッタのマーチン・アンド・カンパニーが工事を請け負うことになった。エマソンはイギリス建築家協会の会長も務めるイギリス建築界の大立者であり、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのデザイ

41) Lionel Cust to Viceroy, 7 October 1902, MSS Eur F 111/182, IOPP, BL.

42) Viceroy to Sir Arthur Godley, Under Secretary of State for India, 22 July 1903, MSS Eur F 111/162, IOPP, BL.

43) Curzon, *British Government, Volume One*, p. 181.

ンを引き受けた時点で、既に五十年にわたってインドで活動していた。ウィリアム・バージズの下で建築を学んだ後にインドへ渡ったエマソンは、当初は師のバージズに倣ってネオ・ゴシック調を用いたが⁴⁴⁾、1870年代前半から折衷主義へと転向し、ヴェネチア、エジプト、デカンなどの様式を取り混ぜる形で、インド・サラセニック運動を起こしていった。それは、構造面ではヨーロッパ建築の手法を用いながら、装飾面では、様々な地域のイスラーム建築の様式を織り込もうとするものだった。エマソンは、また、顧客からの依頼に応じて、持ち送り積みアーチ (corbelled arches) のような、ヒンドゥー建築の様式を取り入れることもためらわなかった⁴⁵⁾。

ホールの庭園をデザインしたのは、アルジャーノン・フリーマン＝ミットフォード (初代リーズデイル男爵) とサー・デイヴィッド・プレインだった⁴⁶⁾。

現場での実務への、インド社会の人々の関わり

ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、フーグリ河右岸の、広大な公有地に建てられた。かつて、カルカッタにおけるイギリス人たちの生活圏の中核だったウィリアム砦に近く、また、官庁街の南側に位置していた (現在も、そうである)。カルカッタ住民に、穏やかで、美しい憩いの場所を提供することが意図されていたことを窺わせる。

しかし、工事の進捗は、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの先駆だったタージ・マハルの時と同様に、と言うべきか、はかばかしくなかった。1904年に基礎工事が開始されたものの、1905年末にカーゾンが副王＝総督職を辞してインドを離れた時点では、まだ本格化していなかった。建物の礎石を置く起工式が、カルカッタを公式訪問中だった王太子ジョージ (後のジョージ五世) を主賓として1906年1月4日に行われたが、その後も工事は迅速に進まなかった。カーゾンの後任の副王＝総督であるミントーが、カーゾンほどの熱意を傾けなかったから、である⁴⁷⁾。

1910年以降、工事はようやく本格化し、建物の上部構造の建築が始まった。1911年末には、エドワード七世の死去によりイギリス国王＝インド皇帝となったジョージ五世が、インベリアル・ダーバーを主宰するためにインドを再訪し、ヴィクトリア・メモリアル・ホール建築工事の進捗状況を視察するために、1912年1月4日に現場に赴いている⁴⁸⁾。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの建築は大規模な公共事業であったから、カルカッタの建築業者、外装・内装業者、カルカッタおよびその周辺から動員された職人や労働者たち

44) 鶴飼哲矢『ロンドンの近代建築—古い都市が生み出した新しい空間』丸善株式会社、1998年、35-39頁。

45) G.H.R. Tillotson, 'A Visible Monument: Architectural Policies and the Victoria Memorial Hall', in Philippa Vaughan (ed.), *The Victoria Memorial Hall Calcutta: Conception, Collections, Conservation* (Mumbai: Marg Publications, 1997), p. 14.

46) Curzon, *British Government, Volume One*, pp. 201-203.

47) Gilmour, *op. cit.*, p. 403.

48) Tillotson, 'A Visible Monument', p. 20.

など、多数のインド人たちに、長期にわたって仕事を与えることになった。建物・庭園の基本的な設計はイギリス人が行い、建物の周辺に配される人物像などの製作も、ヨーロッパ人によって行われた。しかし、現場での建物の構築、外装・内装の工事、庭園の構築などは、インド人の業者、職人、労働者たちが担った。建築作業のために複数の巨大なクレーンが用いられたため、十数年間に及んだ工事期間中、高く聳えるそれらのクレーンの姿は、「カルカッタ市のスカイラインの、おなじみの景観」になった、とも言われる。

インド各地からコレクションを移送し、それらについて調査を行うなど、学術的な実務を担ったのも、インド人たちだった。彼らは、イギリス式教育を受け、カルカッタの教育・研究機関で勤務する、いわゆるインド人新中間層に属する人々だった。

2 できあがったヴィクトリア・メモリアル・ホール

完成に至るまでの、政治環境の変化

ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、1921年に完成した。同ホールの生みの親とも言えるべきカーゾンとは、当時、イギリス政府の外務大臣という要職にあった。しかし、1921年12月28日に行われた同ホールの完成記念式典の主賓は、カーゾンではなく、インドを公式訪問中の王太子エドワード（後のエドワード八世）だった（結局、カーゾンは、竣工したヴィクトリア・メモリアル・ホールを一度も目にする事なく、1925年に死去する）。エドワードは、デリーでは、新都（ニューデリー）造営の進捗状況も確認していた⁴⁹⁾。ディヤン・スジックは、完成した時点で、「デリーで急速に形成されつつある新しい首都によって、この記念堂はずでに影が薄くなっていた」と表現している⁵⁰⁾。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの構築とニューデリーの造営は、同時に進められた期間が長かった。ヴィクトリア・メモリアル・ホールは1905年から1921年にかけて構築され、ニューデリーは1911年から1931年にかけて造営された。つまり、英領インド帝国は、ヴィクトリアからエドワード七世への代替わりを記念するモニュメント（ヴィクトリア・メモリアル・ホール）の建設と、エドワード七世からジョージ五世への代替わりを記念するモニュメント（ニューデリー）の建設という、ともに多額の費用を要するプロジェクトを、第一次世界大戦という緊急事態を挟んで、ほぼ同時に進行させていた。それゆえ、両プロジェクトは、資金や労働力のタイトさなどのせいで、当初の見通しよりも、その完成が大幅に遅れることになった。

49) *Ibid.*, pp. 20–21.

50) ディヤン・スジック（五十嵐太郎監修、東郷えりか訳）『巨大建築という欲望—権力者と建築家の20世紀』紀伊国屋書店、2007年、217–218頁。ジョージ五世は、カーゾンに対抗心を抱いていた。Miranda Carter, *George, Nicholas and Wilhelm: Three Royal Cousins and the Road to World War I* (New York: Vintage Books, 2011), p. 329; Kenneth Rose, *King George V* (New York: Alfred A. Knopf, 1984), p. 354.

ただし、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの工事期間中には、第一次世界大戦以外にも、その構築計画に影響を与えかねない、政治環境の重大な変化が幾度か生じていた。すなわち、①カーゾンのインド副王＝総督職からの失脚、②ベンガル分割反対運動の発生と、その高揚、③カルカッタからデリーへの遷都、④第一次世界大戦末期からのインド・ナショナリズム運動の高揚、である。

カーゾンは、英領インド軍司令官ホレイショ・キッチナーとの政争に敗れて、1905年に副王＝総督の地位を退くことになるが⁵¹⁾、入念にも、と言うべきか、辞職する前に、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのための信託委員会を立ち上げ、その事業の遂行を、インド政庁の意向から切り離していた⁵²⁾。また、前述のように、カーゾンの辞任直後に、王太子ジョージがカルカッタを訪れ、同ホール建設の起工式を行っていた。つまり、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの構築は、この時点で既に、インド社会におけるイギリス王室の威信を左右するプロジェクトになっていた。かくしてカーゾンは、彼の後任の副王＝総督であるミントーのサボタージュはあったものの、インドを離れた後も、信託委員会をいわばリモートコントロールし、同委員会に委ねられた多額の資金を用いることができた⁵³⁾。

ヴィクトリア・メモリアル・ホール構築プロジェクトへのベンガル分割反対運動からの影響も、ほとんど見られなかった。同運動の担い手たちは、むしろ、イギリス国王＝インド皇帝が「インド政庁の誤りを正す」ことを期待していたから、である⁵⁴⁾。インド社会における「英領インド帝国の建国の母」としてのヴィクトリアのイメージは、少なくともこの時点では、それなりに強固であり、ベンガル分割反対運動の高まりによっても揺らがなかった。従って、ベンガル分割反対運動が、「建国の母」のためのホールの建設の中止を求める方向に向かうこともなかった、と考えられる。

カルカッタからデリーへ遷都が行われたことからの、ヴィクトリア・メモリアル・ホール構築プロジェクトへの影響はどのようなものだったか。ティロットソンの表現に従えば、デリーへの遷都は、カーゾンの意図が実現していれば「帝国の聖なる場所」となるはずだったヴィクトリア・メモリアル・ホールを、既にそれが完成する以前に、「地方都市」にあって、「お高くとまっていて、無味乾燥 (high and dry) な存在」にしてしまった⁵⁵⁾。ただし、そうした事情は、構築プロジェクトの継続という点だけから考えれば、かえって同ホールに有利に作用していたのかもしれない。1911年のインペリアル・ダーバーで、デリーへの遷都を発

51) Peter King, *The Viceroy's Fall: How Kitchener Destroyed Curzon* (London: Sidgwick & Jackson, 1986); George Arthur, *Life of Lord Kitchener, Volume II* (London: Macmillan, 1920), pp. 198–223.

52) Curzon, *British Government, Volume One*, pp. 195–196.

53) Nayana Goradia, *Lord Curzon: The Last of The British Moghuls* (Delhi: Oxford University Press, 1993), p. 257.

54) Nityapriya Ghosh and Ashoke Kumar Mukhopadhyay (eds), *Partition of Bengal* (Kolkata: Sahitya Samsad, 2005), p. 185.

55) Tillotson, 'A Visible Monument', p. 20.

表したジョージ五世は、それと同時にベンガル分割の撤回も表明していた。従って、多くのインド人たちの目から見れば、ジョージ五世はいわば「賢君」であり、彼がデリーでのダーバーを終えた後にカルカッタを訪れた際には、同市のインド人住民によって盛んに歓迎されている。そして、前述のように、カルカッタ滞在中、ジョージ五世は、ヴィクトリア・メモリアル・ホール構築プロジェクトの進捗を嘉納し、その継続を改めて確認した。かくして、これ以後、ヴィクトリア・メモリアル・ホール構築プロジェクトは、政治的意識を高めたインド人たちの間ですら、論議の争点となることを免れることになった。翻って、カルカッタのイギリス人住民たちは、カルカッタが英領インド帝国の首都としての地位を失ったことを、強い衝撃と共に受け止めていた⁵⁶⁾。しかし、首都でなくなったとしても、カルカッタが英領インド帝国の「故地」であり、その経済的中枢であることに変わりはなく、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの存在は、その証しとなる、と考えられたはずである。

他方、第一次世界大戦末期以後のインド・ナショナリズム運動の高揚からの、ヴィクトリア・メモリアル・ホール構築プロジェクトへの影響は、小さなものではなかった。自治と民主主義を求める同運動の高揚の中で、「建国の母としてのヴィクトリア」というイギリス側からのプロパガンダが急速に陳腐化したから、である。インド社会の統合を象徴する民衆のカリスマとしてガンディーが台頭したことが、重要だった⁵⁷⁾。しかし、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、政治的モニュメントであるのと同時に、カルカッタ住民にとっての文化・美術活動上のセンター、社会的なアメニティーの供給地となることを、当初から意図されていた。後者の機能は、インド社会における政治的変動の可能性に関係なく必要だ、とみなされていたはずである。従って、政治的に尖鋭な意識を持つ人々の視界からは、半ばフェイドアウトしたような状態で、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの構築の最終段階は「粛々と」進行することになった。

建物の意匠

建築物としてのヴィクトリア・メモリアル・ホールは、巨大で、バランスに関して周到な配慮がなされ、あらゆる部分に繊細な技巧が施されている。そして何よりも、豪華な白大理石で全体が覆われているため、誰の目にも印象的である。ただし、そのスタイルは建築史上の定型のジャンルには収めにくいものであり、折衷的だ、とされる。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの事実上の施主であったカーゾン氏は、同ホールが、その外見からも、英領インド帝国は文化的にハイブリッドな政治システムなのだ、とのメッセージを訴えるものとなることを望んでいた。同ホールは、一定の距離からその全体を眺め

56) G.H.R. Tillotson, *The Tradition of Indian Architecture: Continuity, Controversy and Change since 1850* (New Haven: Yale University Press, 1989), p. 103; Norma Evenson, *The Indian Metropolis: A View Toward the West* (New Haven: Yale University Press, 1989), p. 94.

57) Brown, *op. cit.*, p. 63

ると、全くヨーロッパ的に見える。建物の構造がイタリア・ルネサンス様式を用いているから、である。また、建物の東側と西側には、ギリシア＝ローマ風の柱が並び立っている。これらは、同ホールが、カルカットという、元来イギリス人たちが交易のための拠点として建設した都市に所在する、との背景から、その全体としての印象はヨーロッパ的であるべきだ、とカーズンが考えていたことに由来する。しかし、そうであるのと同時に、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの外見には、さらに興味深い仕掛けが潜められていた。

西洋史的な文脈では、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの先駆、あるいはモデルとしてカーズンが参照したのは、1884年に完成していたワシントン記念塔、1885年に建築が開始され、1911年に完成することになるヴィットーリオ・エマヌエーレ二世記念堂、1897年に完成していたヴィルヘルム皇帝記念堂などだったと考えられる。しかし、ワシントンとローマのモニュメントが古典様式を用い、ベルリンのそれがネオ・バロック様式を用いたことにより、力強さや硬質さを強調し、男性的な印象を与えるのに対して、イタリア・ルネサンス様式に基づくヴィクトリア・メモリアル・ホールのアウトラインは、優美で、装飾的な柔らかさを感じさせる。カーズンが、このホールの主人公が女性であることを意識し、こうした選択を行ったのは明らかであろう。ホールの主ドームの最上部には、女神ヴィクトリアの像が据え付けられており、勝利の旋律をトランペットで高らかに奏でる姿で表現されているが、それはもちろん、猛々しいものではない。

建物としてのヴィクトリア・メモリアル・ホールの女性性には、さらに念入りな伏線が施されており、同ホールの平面図を見ると、それが明らかになる。すなわち、同ホールの建物の配置の仕方は、タージ・マハルのそれをなぞっている。まず、同ホールの建物全体が巨大な基壇の上に置かれており、これはタージ・マハルのありようでもある⁵⁸⁾。また、建物全体の四隅に、四つの塔が配されているが、これは四本のミナレット（尖塔）によってタージ・マハルが囲まれていることに倣っている。さらに、ホールの屋上部では四つの八角形のチャトリ（傘状の装飾）が主ドームを取り囲み、また、前後の玄関口は丈高く設えられており、これらはいずれも、タージ・マハルのデザインと同じである。また、建物の周囲の庭園も、ヨーロッパ的（イタリア・フランス的）というよりは、ムガル式庭園の様式を強く意識しながら、設えられている。なによりも、庭園の北側部分には広大な池が配されているが、ホールの建物全体の姿がそこに映し出されることになり、きわめて印象的である。タージ・マハルが、その北側を流れるヤムナ川に優美な姿を映えさせる形で造営されたことを念頭に置きながら、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの庭園が設計されたことは、明らかである。そして極めつけは、ホールの建物全体が白亜の大理石で覆われていることである。カーズンは、建物のスタイルについて意見を述べる以前から、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは白大理石で覆われべきだ、と主張していた。ホールのために用いられることになった大理石

58) Curzon, *British Government, Volume One*, pp. 191–192.

は、ラジャスタンのマカラナ地方で産出されたものであり、タージ・マハルの建造にあたって用いられたのと、全く同じだった⁵⁹⁾。

前述のように、タージ・マハルの美しさに魅了されたカーズンは、その修復に熱心に取り組んでいた。イギリス国王＝インド皇帝であった女性（ヴィクトリア）に捧げられる建物が、その数世紀前にムガル皇帝（シャー・ジャハーン）に愛された女性（ムムターズ・マハル）に捧げられた建物を下敷きにし、それと響き合おうとする形になっていることは、インド社会に住む人々に対して強力なメッセージとなる、とカーズンは信じていたはずである⁶⁰⁾。

コレクションの配置

ヴィクトリア・メモリアル・ホールを参観に来た人々に、カーズンが具体的に説き聞かせようとしていたのは、①ヴィクトリア女王の生涯、そして、②英領インド帝国の来歴だった。これら二つのテーマについて、彼は、銅像・彫像、絵画、文書、器具などを通じて、参観者たちに語りかけようとした⁶¹⁾。

ヴィクトリア女王の生涯については、以下のようなアイテムが配された。メモリアルの北側出入口（表門）から構内に入った参観者は、まず、出入口と建物を結ぶ軸線上に配置されている、老年期のヴィクトリアをかたどった巨大なブロンズ製の坐像と向き合うことになる。また、建物正面玄関の上方には、ヴィクトリアを主人公とするレリーフが掲げられており、戴冠式の際のヴィクトリアの姿と、女王としてインド大反乱後の統治方針についてのメッセージを執筆中の彼女の姿などが刻まれている。他方、建物と、メモリアルの南側出入口（裏門）を結ぶ軸線上には、凱旋門が設けられており、その上に、ヴィクトリアの息子であるエドワード七世の騎馬像が、配置されている。

建物の内部では、正面入り口を入ったすぐのホールに、ヴィクトリアの孫にあたる王太子時代のジョージ五世と、王太子妃メアリーの大理石像が、互いに向かい合う形で配置されている。次いで、参観者は「ロイヤル・ギャラリー」に導かれる。前述のように、ヴィクトリアの在世中に制作され、バッキンガム宮殿、ウィンザー城などで展示されていた絵画の多くが複製されてインドへ送られており、同ギャラリーでは、それらの複製画が、イギリス国王としてヴィクトリアが関わった事態を参観者たちが時代順にたどることができるように、配置された。

「ロイヤル・ギャラリー」には肖像画も掲げられており、例えば、フランツ・ヴィンター

59) *Ibid.*, pp. 190–191; Andreas Volwahn, *Splendours of Imperial India: British Architecture in the 18th and 19th Centuries* (Munich: Prestel, 2004), p. 106.

60) 後年、カーズンは、早世した愛妻メアリーと自分のために、タージ・マハルに比べればはるかにコンパクトだが、美しく精妙な墓廟を自邸のチャペルの中に設けることになる。Nigel Nicolson, *Mary Curzon: A Biography* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1977), p. 212; Oliver Garnett, *Kedleston Hall, Derbyshire* (Swindon: National Trust, 1999), p. 27.

61) Curzon, *British Government, Volume One*, pp. 192–193.

英領インド帝国の「建国の母」を記憶させる試み

ハルターによって描かれた、若き日のヴィクトリアとアルバートの肖像画、クリスチャン・アルバート・イェンセンによって描かれた、王太子時代のエドワード七世の肖像画などがある。さらに、同ギャラリーの南側の壁には、「インドで最大の油絵」と称された、1876年に王太子時代のエドワード七世がジャイプールへ公式入城する姿を描いた、ロシア人画家ヴァシーリー・ヴェレシチャーギンの作品が掲げられた。同ギャラリーには、ヴィクトリア女王が日常に用いた品々も展示された。彼女が子供の頃に親しんだピアノ、ウィンザー城で公務に用いた書き机と椅子などであり、これらは同ギャラリーの中央部に置かれた。

「ロイヤル・ギャラリー」を出て主ホールに達すると、その中央には、二十歳代前半頃のヴィクトリアをかたどった等身大の大理石像が配置されており、その立像を囲む形で、ホールの壁面の八方に、ヴィクトリアがインド社会全体に向けて発したメッセージが、碑文として嵌め込まれている。英語およびインド社会の諸語で記された（アラビア文字、ナガリー文字の双方が用いられている）、ヴィクトリアがインド大反乱後に発したメッセージと、1877年のインド女帝即位に際して発したメッセージである。

英領インド帝国の歴史・文化・芸術についての総合的なセンターとしての性格をヴィクトリア・メモリアル・ホールに持たせようとしたカーゾンの意図は、どのように表現されていたのだろうか。そうした意図に関連する美術館的な展示物は、以下のようなものだった。メモリアルの敷地の表門前にある、ロータリーの中心部には、カーゾン自身の大理石製の立像が置かれた（この像は、現在は建物の南側に移動させられており、ロータリーの中心には、オーロピンド・ゴシュ [ベンガル出身の代表的なナショナリスト、宗教家] の立像が置かれている⁶²⁾。建物内部の「スカルプチャー・ギャラリー」では、英領インドの「英雄」たちの立像・胸像が展示されており、また、「ポートレート・ギャラリー」では、そうした人々の肖像画が掲げられた⁶³⁾。メモリアルの造営に合わせて新たに製作された立像・胸像や肖像画がある一方で、既に別の場所に設置ないしは掲示されていたものが同ホールへ移され、展示された例も多かった。これは、展示物の歴史的同時代性を追求することにより、学術的な施設としてのメモリアルのレベルを高めようとする、カーゾンの意欲に基づいていた⁶⁴⁾。カーゾンは、ホールにおいて語られる英領インド帝国の歴史の包括性を高めるために、タイプ・スルタンなど、イギリス東インド会社軍と戦い、敗れた「高潔な英雄」たちの肖像画ま

62) D・キャナダイン（平田雅博／細川道久訳）『虚飾の帝国—オリエンタリズムからオーナメントリズムへ』日本経済評論社、2004年、206-207頁。

63) カーゾンは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールを「インドにおけるナショナル・ポートレート・ギャラリー」にすることも意図していた。Curzon, *British Government, Volume One*, pp. 95-96.

64) デボラ・スワローは、「指導的なイギリス人やインド人たちの代表的な肖像画や、インドの歴史を語る絵画を手に入れようとするカーゾンの探求心が、間接的に、ヴィクトリア・メモリアルが、この時代の芸術作品に関する、世界で最良のコレクションの一つの所有者になることを確実にした」と言う。Deborah Swallow, 'Curzon's "National Gallery": The Art Collections', in Philippa Vaughan (ed.), *The Victoria Memorial Hall Calcutta: Conception, Collections, Conservation*, p. 57.

で含めて展示することを意図していたが、それは実現しなかった⁶⁵⁾。

歴史博物館的な展示物としては、ムガル帝国時代末期から英領インド時代にかけて起きた「重要」とみなされる事態・事件などについて、同時代に作成された絵画、アクアチント、文書、武器、甲冑などを展示することにより、英領インド帝国の来歴を語ろうとした。

まとめに代えて

皮肉にも、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、完成した、まさにその時点で、既に政治的には「過去の遺物」になっていた。メモリアルは、1911年以前のカルカッタの「黄金時代」を、その居住民に思い出させる存在として誕生した、と考えるべきなのかもしれない。1911年以前、カルカッタは、文字通り英領インド帝国の首都であり、ベンガル地方全域を舞台とする様々な経済活動の不可欠の結節点としても機能していた。イギリス文化とインド文化の接触から刺激を受けた人々による、活発な知的活動の展開も見られた。また、市民意識の成長に伴い、いわゆるインド人新中間層による、社会的、政治的な活動も精力的に行われるようになっていた⁶⁶⁾。ヴィクトリア・メモリアル・ホールのたたずまいは、そのような時代のカルカッタを体現するものでもあった。

しかし、ヴィクトリア・メモリアル・ホールという新たなシンボルをカルカッタに与える、というアイデアを提起したはずの、当のイギリス人たちが、英領インド帝国の首都としての地位を1911年にカルカッタから唐突に奪ってしまった。さらにイギリス人たちは、彼らによるインド社会の支配を継続させるための方途として、ベンガル地方の宗教的複合性をコミユナルな対立へと導き、英領インド帝国の終焉にあたっては、同地方を、インドに所属する西ベンガル州と東パキスタンへ分割するという、悲惨な置き土産すら残した。

かくして、インドとパキスタンがイギリスから分離独立し、イギリス人たちの大半がインド亜大陸から立ち去って以後、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、カルカッタに居住する人々にとって、いわく言い難い思いを抱かせる存在になった、と考えられる。同ホールが、自分たちを支配していた英領インド帝国のシンボルであり、帝国の権威を彼らに受け入れさせることを目的とする装置であったことが、誰の目にも明らかになった。イギリスからの独立を達成したインド国民は、英領インド帝国のありようを否定し、それを克服することによって自らの新たなアイデンティティを獲得した（あるいは、本来のアイデンティティを回復した）はずであり、そうした考え方を突き詰めるとすれば、ヴィクトリア・メモリアル・

65) Metcalf, *op. cit.*, p. 210.

66) Blair B. Kling, *Partner in Empire: Dwarkanath Tagore and the Age of Enterprise in Eastern India* (Berkeley: University of California Press, 1976); Ernest Rhys, *Rabindranath Tagore: A Biographical Study* (Honolulu: University Press of the Pacific, 2004); Sumanta Banerjee, *The Parlour and the Streets: Elite and Popular Culture in Nineteenth Century Calcutta* (Calcutta: Seagull Books, 1989).

ホールは、破却される可能性もあったと思われる。

しかし、カルカッタに居住するインド人たちは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールを取り壊そうとはしなかった。カルカッタという都市そのものが英領インド時代の産物であり、自分たちはカルカッタにあってそのような時代を生きてきたのであるから、ヴィクトリア・メモリアル・ホールが象徴する、そうした時代と場所についての様々な記憶は、自分たちのアイデンティティの枢要な部分を成している、とみなされたからなのかもしれない。

さらに、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、カルカッタ住民とともに、1940年代にカルカッタを舞台として生じた、激しく、悲惨な事態を幾度も「経験」していた。日本軍がベンガルへ侵攻してくるかもしれないとの恐怖、「インドを出ていけ」運動の高揚と英領インド帝国によるその鎮圧、ベンガル飢饉の衝撃、インド・パキスタン分離独立直前のコミューナルな対立の激化と虐殺、そしてインド・パキスタン分離独立に伴う大量の難民の流入と流出、などである。こうした激動の間にも、当然のことながらヴィクトリア・メモリアル・ホールは、擬人化して表現するとすれば、静かにたたずみ続けていた。映画「ヘイラム (Hey Ram)」の中には、1946年8月にカルカッタでコミューナルな暴動が始まる直前の時点で、主人公が、彼の部屋の窓からヴィクトリア・メモリアル・ホールのドームを眺めるシーンが存在する。カルカッタが、更なる混乱と激動の時代へ移行することを暗示する意図がこめられていた、と思われる⁶⁷⁾。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、また、政治的モニュメントであるのと同時に、カルカッタ住民にとっての文化・芸術活動上のセンター、社会的アメニティーの供給地となることも、当初から意図されていた。とりわけ社会的アメニティーの供給に関しては、レクリエーションを目的として多くの人々が気軽に訪れ、楽しむ（建物には入館せず、庭園だけを散策することによって）場所になっていた。

独立後のインド社会には、ヴィクトリア・メモリアル・ホールが、英領時代にカルカッタ周辺で数多く建設され、今なお、廃墟としてその姿をさらしているヨーロッパ風の大邸宅と同様に、ゆっくりと廃れていき、人々の記憶から消え去ることを期待する人々もいたのかもしれない⁶⁸⁾。しかしカルカッタ住民は、結局、自分たちのアイデンティティの一部を想起させる、この、ヴィクトリア・メモリアル・ホールという記憶のためのメディアを、重要な改変を加えながらも、消去することはしなかった⁶⁹⁾。そのいきさつについては、別稿で論じたい。

67) 2000年にリリースされたタミル語映画であり、カマル・ハサン (Kamal Haasan) が、制作／監督／脚本／主演を担った。

68) Joanne Taylor, *The Forgotten Palaces of Calcutta* (New Delhi: Niyogi Books, 2006).

69) 1980年代半ばから1990年代半ばにかけて ICOMOS (国際記念物遺跡会議) の会長を務めたバーナード・フィールデンによれば、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは「国際的な偉大さ (stature) を有する建築物であり、記念館の歴史と博物館の歴史の双方において地位を占めており、大規模な国際的ツーリズムの焦点になりうる」存在である。Bernard Feilden, 'Architecture and the Environment: Conserving the Victoria Memorial Hall', in Philippa Vaughan (ed.), *The Victoria Memorial Hall Calcutta: Conception, Collections, Conservation*, p. 117.